5　それぞれの所感（前村の場合）

⑴　無人島に行こうと思ったきっかけ

私は本校に赴任して３年目になります。赴任して最初に歓迎会がありましたが，その会に全職員が参加し，全職員で盛り上げようとする雰囲気があり，この学校に来てよかったという強い気持ちを持ったことを今でもよく覚えています。その歓迎会の時にも，無人島に行くツアーを毎年のようにやっているので参加しないかと誘ってもらった。その時は多少の興味を持っただけであった。しかし，その後職場でかわるがわる４名の先生方から無人島の体験談を具体的に聞いて，せっかく奄美に来たのだから日頃体験できない貴重な体験に積極的にチャレンジしてみようという気持ちになり，赴任して早々の５月の連休には数多くのキャンプ用品をアマゾンで注文した。どのようなものが必要か，経験した先生方に話を具体的に聞いて，情報を整理して購入したので無駄な買い物をせずに済んだ。キャンプに行く準備は早い段階で整ったものの，無人島に行く時期は９月の体育祭の代休の時か，10 月末の文化祭の代休の時に計画されていたので，その時期が顧問を務めるラグビー部の花園予選前という大事な時期ということもあり，参加できずに２年が終わった。もともと自然は大好きで，魚釣りやキャンプ，登山などに興味があり定期的に趣味で嗜んでいた経験と，先生方から無人島の楽しい体験談を聞いたことで，一層無人島に行きたいという気持ちが強くなりました。

⑵　前もって準備するもの

事前に無人島での食事や生活を考えて次のようなものを準備した。まず，個人で準備したものは，ポップアップテント（簡易的なテントで広げるのは簡単だが収納するとき折りたたむときに癖がある。水を通すため雨の日は使用できない。），エアーマット(ピロー付き，寝袋の下に敷く)，ランタン(USB 充電式)，寝袋，シングルバーナー(カセットコンロ用ボンベ使用タイプ)，トロリー用バック（いろいろな道具をまとめて入れられる，イケア製)，角形キャンピング鍋（６点セット)，アウトドア用折り畳み椅子，アルミロールテーブル，ヘッドライト，クーラーボックス，水（２リットルペットボトル６本)，ライター，紙コップ，金属製コップ，氷，塩・塩こしょう，割り箸，包丁，コーヒー（パック)，ティーパック，釣り用の餌（キビナゴ２パック，なまいきくん２パック)，釣り具（竿・リール２セット，ふかせ用仕掛け，３号うき２本（夜釣り用に電気ウキ）等を持参した。

全員でまとめて購入したものは，バーベキュー用の肉（牛・豚・鶏)・ソーセージ・ハム・卵・その他野菜・ビール・焼酎・氷・つまみ等を買った。(大冨先生が準備してくださった大きなクーラーボックスに入れた。）当然，夏であればこの他に氷がかなり必要であることが予測される。

実際にキャンプをしてみて，これ以外に持って行くべきだったと思ったものは，まな板，調理用の大きめの鍋，だし液・さしみ醤油・味噌等の調味料，食材を入れるざるやボウル等である。今回は煮魚のみの調理だったので，天ぷら用の油を持っていくと更に料理の幅が広がるはずである。貝類がとれたときにバター等あるとさらによい。しかし，基本的には海水の塩味と天然の素材だけで，味は十分である。なければないなりに何とかなるので完璧に準備する必要はない。荷物が増えると移動が大変なので，やはり基本は最小限の荷物にまとめる方がよさそうである。今回のように砂浜まで船が寄せられるところはよいが，そうでないところでは荷物の運搬が困難となるので注意が必要である。

⑶　無人島ツアー初日

地下駐車場に８時半に集合し，恒例の正門前での写真撮影を終えて，向段号で古仁屋港に向かった。

当初の予定では大谷号で行くことになっていたが，どうしても荷物が積みきれなかったため急遽予定を変更した。それでも足もとや空きスペースがないくらい荷物を積んでの移動であった。予定よりも早く現地に着いたため，古仁屋のＡコープでゆっくり買い物をして，それでも時間にゆとりがあったため港周辺を探索した。大冨先生が言うには，全ての海亀が絶滅危惧種に指定されているらしいが，そのなかでも特に珍しい亀を発見するなど，何かを予感させるいい流れで無人島ツアーがスタートした。しかし，事前に問題点があることを知らされた。東京都の中心部から南に約 1,000 キロ以上離れた小笠原諸島付近の海底にある火山「福徳岡ノ場」が 8 月に噴火し，噴火で生まれた大量の軽石が千数百キロ離れた沖縄・奄美地方に漂着して深刻な被害が出ており，船の出入りができる軽石が周辺に漂着していない無人島を探さなければならないということだった。そのような中，息子をプロ野球選手に持つ海上タクシーの船長の船で候補地を何ヶ所か確認した後，軽石の影響が少なく船を砂浜まで近づけることが可能なふるさと浜に候補を定め，無事に昼過ぎに到着した。まずは，船からすべての荷物を 4 人で協力して流れ作業で砂浜に降ろした。船長と別れを告げ，本格的に無人島キャンプがスタートした。荷物はそのままにして，最初に砂浜の散策をした。海に浸かって，端の方にある岩場まで確認した。テントを張る場所や食事をする場所を決め，自分たちの荷物を移動した。かなりの距離を漂流してきた軽石まじりの砂浜に足を取られながら，何往復もして運動不足の身体が悲鳴を上げた。さらに，明日までの食事を作るための，薪となりそうな木や竹を拾って，繰り返し運んだ。その後，食事をする場所が斜面になっていたので，木の板を使って何回も砂を削って平らにした。かなりの重労働で 11 月の終わりにもかかわらずかなりの汗をかいた。やっとのことで食事場所を完成させた。次は食事場所のすぐ近くに各自でテントを張った。あらかじめ，エアーマットに空気を入れたり，ランタンを設置したり完璧に寝る準備までしっかりとしておいた。テントの四隅に水の入ったペットボトルをおいて，念のため飛ばされないよう風対策をした。夕方までたっぷり時間があったので，各自自由行動することになった。大谷先生は銛を手に，素潜りを慣れた感じで長時間続けていた。残念ながら獲物は手に入れることができなかったようです。向段先生は，テントの中で気持ちよさそうにギター演奏をしていたそうです。大冨先生は島の散策や夕食に備えて入念なチェックと準備をしていたそうです。

⑷　今回のキャンプの目標と役割

今回の私に任された役割は，趣味である釣りを楽しみながらみんなの食材を調達することである。さらに，はじめての無人島で海の中の様子もわからず，どのような仕掛けで，かつ限られた時間でどのようにしてたくさんの魚を釣り上げるかが課題であり，それを最大の目標とした。珊瑚礁に囲まれた場所であることは聞いていたので，棚（ウキからハリまでの距離）を慎重に確認し，仕掛けを根掛かり等で無駄にしないように常に注意しながら釣りをすることにした。まずは，船を着けた場所が珊瑚礁のない砂地であることがわかっていたので，その場所で釣りを始めた。用意した２本の竿のうち１本はオキアミを餌にした「浮き釣り」，２本目はキビナゴを餌にしてウキをつけない「ぶっ込み釣り」に挑戦した。しばらくして砂地に生息する虎ギスが 2 匹とオジサン（という魚）が 2 匹ずつ釣れた。約 3 時間かけての釣果は前半に釣れた 4 匹のみだった。その食材となる魚を持ち帰り捌いた。

⑸　楽しみにしていた食事（バーベキュー）

夕食のメニューに煮魚を加え，自分の最低限の役割を果たすことができたことに，内心ホッとした。主な夕食の食材は事前に購入した肉（牛・豚・鶏）と素潜りの後に大谷先生が岩場で取ってきた貝（トコブシの仲間）を食材としたバーベキューを，みんなでおいしくいただいた。自然の中で食べるおいしい食事のせいかビールや焼酎の進みが速かった。私は食事をしながら並行して夜釣りをすることにした。夕まずめ時（夕方から夜にかけてだんだんと暗くなり，魚の活性が高まるといわれる時間帯）を狙うのは釣りの基本であるので，狙わない手はない。餌をキビナゴにして，昼間と同様に２種類の仕掛けを投げ入れて，早々に 30cm オーバーのアカヒメジとフエダイが次々に釣れた。昼間とは違い一気にサイズアップしたためテンションも一気に上がった。食事が一段落すると会話が弾み，せわしい日々の生活を忘れるひとときとなり，改めて無人島ツアーに参加してよかったと実感した。その後は向段先生のギター演奏のもとカラオケ大会が始まった。非常に贅沢なひとときであり，みんな声高らかに歌い盛り上がった。どんなリクエストにも応えてくれるバンドマンは神である。星がきれいで心地よい波の音が聞こえる環境で夜中まで時を忘れて歌いまくったのが最高の思い出である。夜の楽しいひとときに満足して，締めくくりに食事会場の片付けをした。酔ってはいたものの，火の後始末までみんなで確実に行い，各自テントで休んだ。

⑹　無人島ツアー２日目

２日目の朝は，波の音で明け方に目が覚めた。薄暗い中に小雨がパラパラ降っていたが，しばらくしてやんだ。私はモーニングコーヒーを入れて，海を眺めながら飲んだ。贅沢なひとときだった。あとの３人はまだ寝ているようだった。釣りの研修を最大の目標に掲げた私は，朝まずめ（夕まずめと同じく，魚の活性が高まる時間帯）を攻めることにした。みんなが寝ている中，一人で研修を始めた。明るくなるまで，アタリはあるものの，なかなか釣り上げることができなかった。日が昇り明るくなって間もなくすると，ヒトスジモチノウオが２匹釣れた。30cm オーバーでなかなかいいサイズだった。それなりの引きがあって楽しかった。そこからしばらくアタリのない時間帯が続き，我慢の連続であったが，無人島の最高の景色に癒される時間でもあった。１時間ほど待つと大きなアタリが出始めた。一度はウキが素早く沈んでヒットしたが，珊瑚礁に潜られて仕掛けを切られた。仕掛けを変えて同じ場所に投げるとまたすぐに大きなアタリがあり，今度は素早く合わせることができた。かなりの引きでいい手応えがあり，釣り上げてみると 40cm オーバーのオビブダイ（エラブチ）であった。写真にもあるように，ハリが前歯に少しかかっただけの状態で釣り上げることができたのはラッキーだった。さらに大物を狙って釣り続けたがその後は全く釣れなかった。しかし１匹だけではあったが，大物を釣り上げることができたので満足だった。

⑺　最後の無人島での食事

釣りを終え食事会場に帰って，大冨先生が持参されたホットサンドメーカーで作ってくれた特製ホットサンドを４人で食べた。食パンにハム･カマンベールチーズ・ツナとコーンをあえたもの・キャベツを食材にした本格的なホットサンドで非常においしかった。朝釣った魚もすべて捌いて，昨日同様に煮魚にした。いいサイズのエラブチが釣れたので，できれば違う調理法で食べようと試みたが，調味料や揚げ油，刺身にするような包丁等がなく断念せざるを得なかった。刺身や天ぷら等他の調理方法を試すことができればもっとおいしくふるまうことができたのではないかと反省した。しかし，無人島で調達した食材を残らず調理できたことは非常に満足である。今回のツアーでは２回しか食事のチャンスはなかったが，無人島の素晴らしい景色を見ながら，４人で楽しい会話を交えながらの食事は最高でした。そのような観点から，食事をする場所をしっかり確保することや整備することが大事であり，最初に時間をかけて重労働ではあったものの頑張った甲斐があった。テントを張る場所と食事をする場所が非常にいい条件の場所で，快適な時間を過ごせたことに感謝したい。

⑻　無人島ツアー終盤

いよいよ後半を迎え，帰りの時間まで残り少なくなってきた。大冨先生と向段先生は交代でサップに乗り，無人島周辺の探索を楽しんでいた。２人ともマリンスポーツの達人で乗り慣れている様子が見てとれ，楽しそうであった。是非次は釣り以外のことにも挑戦してみたいものである。私が釣り用に使っていた椅子は，大冨先生が隣の浜から拾ってきてくれたもので，かなり役に立ち気に入った。そのころ大谷先生は，昨日精力的に取り組んでいた素潜りではなく，岩場や砂浜の散策をのんびりとした感じで楽しんでいた。昨日の夜食べた貝は，岩場の散策で発見して獲ったものである。忘れられない味であった。私は，最後まで釣りに執着したが，朝釣れたきりで，その後は全く釣れなかった。

⑼　今回の釣りで学んだこと

岩や珊瑚がない砂地では，ぶっ込み釣りがおすすめで，遠投の浮き釣りも有効である。今回はえさにオキアミまたはキビナゴを使用し，どちらも釣果はあった。夜は断然キビナゴの方が食いがよい。珊瑚礁や岩場の周辺では，仕掛けを岩場や珊瑚礁の間に引っかけるおそれがあるので，深さをしっかり確認した上での浮き釣りがお勧めである。その際の注意点として，アタリがあって合わせた後に，魚に岩場か珊瑚礁のすきまに潜り込まれると二度と引き上げることができないので，アワセのタイミングには注意しなければならない。ただ今回も潜られることを心配して早めにアワセようとして，餌だけとられるケースが何回もあったので，経験を重ねて判断してそのタイミングを調整していくしかないと思った。釣り始める前はこのような無人島には普段釣り人がいないはずなので，魚の食いがかなりよいのではないかと予想したが，意外にあたりのない

時間帯が長く続き，厳しい釣りとなった。今回の反省をもとに次は船釣り（ゴムボート等）も含め，様々な仕掛けを使って幅広い釣り方に挑戦し，その場所に一番合った方法でたくさんの食材を手に入れたいものである。季節が違えば他の種類の魚が釣れる可能性もあるはずである。それにしても，今回は準備が不十分だったわりには二日間で我々４人分の食材としては十分な釣果があったので満足している。

⑽　最後の大仕事

いよいよ船の迎えが来る時間が近づいてきたため，テントの片付けをはじめ，すべての道具の片付けや清掃を全員で行った。私のテントは，設置するのは簡単だったが，片付ける際にたたみ方に癖があり簡単に折りたたむことができなかった。そこで，同じ種類のテントを使用している向段先生に協力をもらってかなり時間をかけてもとの状態に折りたたむことができた。次からは一人でテントの片付けができるように練習してから本番に臨みたい。すべての道具の片付けとゴミ処理と清掃をすませて，最後に全ての荷物を，最初に船が到着した場所まで運んだ。昨日同様に砂浜に漂着した軽石の影響で歩きづらく，荷物移動で何往復もしたためかなり体力を消耗した。砂浜にはサンダルが適していると思ったが，軽石がサンダルの中に入ってさらに歩きづらくなり想定外であった。これも経験してみないとわからないことであり，いい勉強になった。来たときよりも美しくすることを心がけ，それが実現できたことの満足感があり，最後に心地よかったことが心に残った。その後迎えに来てくださった船に乗り古仁屋の港まで帰った。まだ，もっと無人島生活を楽しみたいという気持ちを切り替えた後，帰る途中に船の上から見た景色は一生忘れなれない思い出となり，またこの島々のどこかを訪れたいと思う日が近い将来必ず来ることを確信した。

⑾　無人島ツアーに初参加して

まず，今回同行していただいた先生方に感謝いたします。普通なら冬を目前にした時期には計画しないところをあえてこの時期まで待っていただいたおかげで，念願の無人島ツアーに参加することができました。仕事のことをすべて忘れて，２日間素晴らしい景色や環境に囲まれて有意義な時間を過ごすことができました。奄美高校に赴任して２年間の疲れ(?) を解消することができ，気持ちもリフレッシュできて最高の思い出となりました。できることなら毎週末無人島に行きたいものです。この環境のおかげで，日頃できない話も思う存分することができ気持ちが和んだ気がします。サップや素潜り，魚釣りやギター演奏など自分達の趣味を好きな時間に思う存分できることも無人島ツアーの醍醐味である。その趣味を共有し語り合う中で，楽しみがまた一つ増えていく喜びを他の先生方にも是非体験していただきたいです。私のようなキャンプ素人でも全く心配することなく普通に参加することができました。

最後に，経験豊富な先生方のサポート体制が万全ですので，今後多くの先生方が奄美にいるうちに貴重な無人島ツアーに参加されることを強く願っています。